

一、統一局

地安門外のようだ。西側の塀の上に一枚の告示が貼ってあり、多くの人が押し合いへし合い、皆上を向いて注意深く読んでいます。何人かはそれぞれに大きな声を出して読んでいます。わたしは心がぼーとなって、この人たちは車夫だろうかと思ったが、中に老人や女の子が混じっているから、当然車夫ではない。だがみんな同じように着物の上にチョッキを羽織り、真ん中に丸い図が書いてあり、中国と外国の二つの記号が書いてある。訝しく思っていると、側の一人がムニャムニャと読むのが聞こえた。

“目下収入は充足しているにつき、人民・軍等は加餐すべく、告示の日より始めて、老若男女を問わず、毎日米二斤、麦二斤豚・羊・牛肉各一斤、馬鈴薯三斤を受け取るべし、油塩はこれに準じ、割り引くことを得ず。違反する者は、規定に従って処分する。

飲食統一局長三九二七鞠躬”

このやり方は、とてもはっきり書かれているが、安価な放出ではないし、飢饉救済でもない。心に非常に曖昧に感じた。ただある女がある親父に言うのが聞こえた。

“三六八（まるでそういう数字のようだが）おじさん、おたくの食欲はまだ大丈夫ですか？”

“六八二——いや、六八八二さん、なんでいいもんかね！前のでもう無理してるのに、今また二斤の肉に、そのほかにも増やされたんでは、ほんとに食べきれん。命を投げ出して処分されるしかないよ。”

“そうね、じゃがいもを食べるのが怖いわ、毎日これを食って、飽き飽きしてるけど、でもどうしたら食べないでおけるかしら。”

“ある時など、まだ一斤の米しか配給してない頃だったが、規六十歳以上の人間は安坐すべし、故なくして直立するを得ず、以て優待を示す、って規定されてね。わしはじっと坐っているのに耐えられず、ちょっと立ち上がったところ、まずいことに臨検に見つかってね、平等庁にしょっぴかれて三日の禁固を食らった。”

“だったら、今日はどうして出てこられたんですか？”

“ここに証明書があるよ。これは行坐統一局からもらったんだ。一日の間安坐条例に従って処理するを要せざるを許可す、とね。”

わたしはこのわけのわからぬ話を聞いて、前に出て仔細を尋ねてみようと思ったが、その老人は早くもわたしを見つけて、慌てて走り寄って、わたしの背中を見るや、叫んだ。

“Xさん、あんたはなぜまだ登録しとらんのかね？”

わたしは何を登録しなければならぬのかわからなかったもので、聞き返そうとした時、突然耳元で、誰かが叫んだ。

“なぜ登録しないのか？”大きな男が手に、“姓名統一局長一二三”と書いた名刺を持って、わたしの前に立ちよだかた。わたしはびっくりして、身を翻すや駆け出し、一刻もしないのに随分遠くまで逃げた。

※初出：1922年8月19日『晨报副刊』